漢字を使って“お話”を見せる

抵抗は初めからありました。ある園長は「わたしは、幼稚園でかなを教えているのさえ苦々しく思っています。まして、漢字を教えるなんて、とんでもない暴挙です」と、顔色を変えてわたしに食ってかかりました。

「わたしも、今までのような漢字教育なら反対ですし、ことに、幼児にかなを教えるのには大反対です。ですが、だまされたと思って、20 分ほどでよろしい。園児をわたしにお貸し下さい。わたしの“漢字教育”というものをお目にかけます。その上でご批判をいただきたいと思います」

わたしはこう答えて、実際に指導をしてみせました。「お話をしてあげましょうね」と言って、園児たちに話をしながら、その中に出てくる言葉を黒板に書きつけていく方法です。

10 分か 15 分の話の中にくり返し出てくる言葉を黒板にいっぱい書きつけました。その漢字は全部で 30 字くらいはあったでしょう。話が終わって、わたしが黒板の漢字を指さしますと、皆、元気よく読みます。ずっと前から知ってたよ、というような顔で読む園児たちの様子を、じっと見つめていた園長は、指導が終わって園長室に引き上げるとすぐ言われました。

「このような漢字教育なら、うちの園でも早速やらせていただきます」と。

漢字教育というと、すぐ漢字の詰め込み教育だと思われるところから、言下に「とんでもない」と言って否定されがちです。また、「漢字教育より先に、すべきことがある」とも、よく言われます。これに対してわたしは言うのです。

「先にすべきことがあるなら、それを先にやって下さい。ただ、そのすべきことに漢字をお使い下さい。とくに“漢字を教える”のではありません。“漢字で教える”のです。漢字で教えた副産物として、幼児が漢字を覚えることを期待しているだけです。ですから、覚えなくても一向かまわないのです。しかし、たとえ覚えなくても、見せておけば、それだけのことはあろう、と考えているのです」

“ローマは成るの日に成るにあらず”です。漢字もまた読める日の前に、読めないけれども、読めるための下地となる“読み”がなければなりません。“漢字で教える”教育とは、そういう下地になるためのものです。